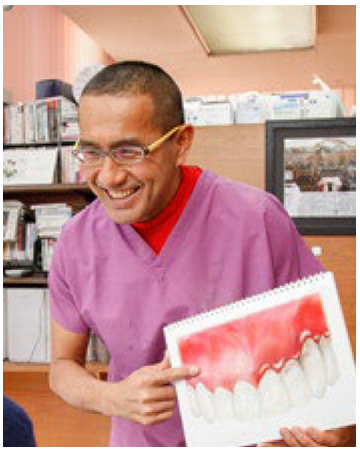
市井の名医㉚

宇都宮で三代にわたる歯科医院

螺良修一

医療法人社団源徳会
螺良歯科医院院長

渡邊昌



東武宇都宮駅から徒歩 4 分、宇都宮市江野町にある螺良歯科医院は、4 階建ての古いビルで壁面には蔦が這い上っている。初代螺良源太郎（1970 年没）が傷んだ歯を抜く事が歯科医の仕事だった時代に「歯に勝るものなし」という信念で開業、その想いは現在の院長にも受け継がれ、患者の信頼も厚い。歯の健康は栄養や、睡眠、サプリメントなどさまざまな要因が関係してるが、いまや統合医療の立場から気配りしてくれる頼りがいのある歯医者さんである。

院長の螺良（つぶら）修一氏は「運命に逆らわず跡を継ぐため」と、祖父・父が学んだ日本歯科大学に進学。1988 年 3 月卒業後、同大学大学院に進学し研究に没頭する中で唾液の効果に着目。開院 85 年の伝統を持つ実家の螺良歯科医院に戻り、医院のモットー「歯に勝るものなし」の考え方を実践しながら歯科医として臨床を行いつつ研究を続け、納豆菌による歯周病への効果を解明。2008 年には FDI 国際歯科連盟から Uniliver Award を受賞し、スウェーデンにて講演も実施。著書に「指導 & トークに今すぐ活かせる 知っ得！納得！健口免疫アプローチ」。日本歯科大学新潟生命歯学部非常勤講師として生化学を教えている。また、歴史のある医院の院長ではあるが、日本歯科大時代には小柄なからだでアメリカンフットボールに活躍し、この体力、気力で最先端の歯科統合医療を進めている。

初代院長の、「歯に勝るもの無し」、という一家言は開院 85 年、螺良歯科医院の一貫した医療理念である。歯科診療の歴史をみると、実用的な治療から美容整形的なものが加わり、“インプラント人工歯”などは先端医療とされるが、最近は不都合な合併症などもあって、やはり自身の歯にはかなわない。

「**抜かない・削らない**」をモットーとして、出来る限り患者の歯が一本でも多く残るよう、最善を尽くして治療にあたってきたのが宇都宮の螺良歯科病院である。宣伝などしなくても長年通う患者が多いことは、地域からそれだけ信頼されているからであろう。

初代院長の螺良源太郎氏は 85 年前に「歯は簡単に抜いてはいけない・・・」の信念で本院を開設、グラグラ

開院 85 年の伝統を持つ螺良歯科病院

若くて元気な歯科衛生士の皆さん

した歯は固定し補強し、自然に抜けるまで大切にするよう来院者に説いていたそうで、それが二代目螺良勉院長、三代目の修一院長に受け継がれている。

健康への憧れが人一倍強かった幼少期

幼少の頃、虚弱体質で喘息や感染症になりやすい子供であった。どうして僕だけこんな体なんだ、ずっとこのまま過ごさなければいけないのだろうかと、悩み、10 歳になったとき、思いきって水泳を始めてみたらメキメキと健康な体に変化していった。

「水泳をきっかけに手に入れた丈夫な体。もう人生が変わりましたよ。憧れだった運動部にも入ることができて、食べたいものを好きなだけ食べられる。ずっと夢に見た生活を実現できたときの感動は、何ものにも変えられません。今でも鮮明に覚えています」。

昔の辛い経験があったから、些細な体調の変化にも敏感であり、健康の大切さを今でも実感できる。それが、螺良氏を歯にとらわれない医師に育てたのであろう。

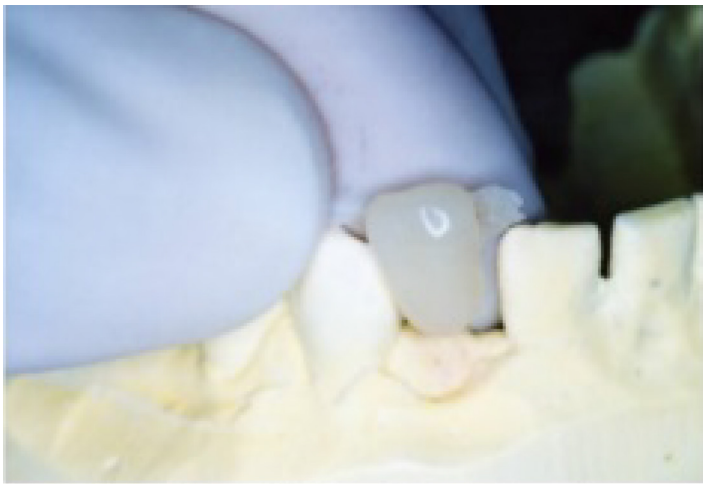
運命に逆らわず突き進む

螺良氏のポリシーはまずは、自分の運命を受け入れること。その上で、どのように行動するかを考え、前向きに挑戦し続けていくというものだ。螺良氏は、歯科医生活において二つの大きな転機があったという。一つ目は大学を卒業して大学院に行こうと決めたとき。当時、基礎に進むか臨床に進むかを迷っていて、内心では、臨床に行きたいという思いが強かったが、結局、家族や親戚の強いすすめから基礎医学に進む。大学院に進んでから最初の 2 年間は「本当にこの選択は間違っていなかったのか？」と自問自答の日々だった。自分にとって意義のある研究が出来ていると思えなくて。特に、臨床に出た友人たちが羨ましくてしかたがなかった。患者さんを診察した話を耳にするたび、早く歯科医師として働きたい、そんな風に思っていたそうである。

しかし、大学院生活も後半にさしかかってきた頃、一つの小さな成功をきっかけに、研究に対するモチベーションが一変した。それは、唾液の中に抗菌作用の強いたんぱく質を見つけたこと。その瞬間彼は、なんて有意義な、将来性のある研究をしているんだとハッとさせられたという。そこから日々の研究にも熱が入った。

「今になって思うのは、唾液の研究を通じて身体の仕組み

30 代女性の歯牙欠損症（左）、今ならインプラント適用だが、裏側からブリッジを工夫することで 12 年後でもこの状態である（右）



ブリッジ歯の仮合わせ（正面図）

ブリッジ歯の仮合わせ（裏面図）

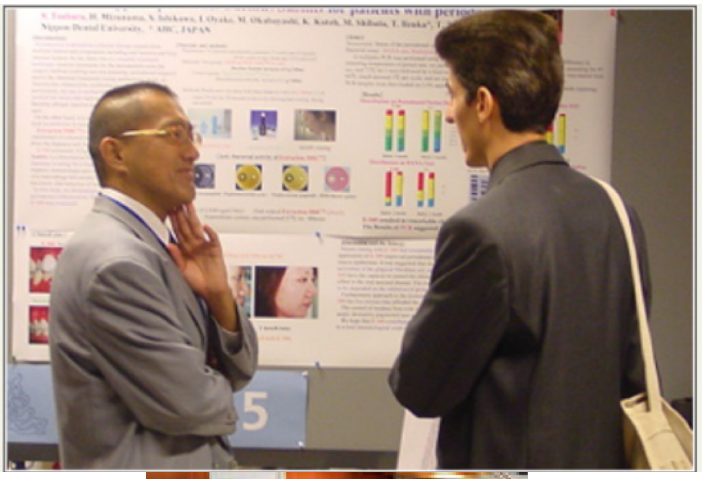
のごく一部を解明できたからこそ、ここを入り口にあまりやっている人がいない歯科免疫に興味を持つことが出来た。もし、周囲の反対を押し切って、大学卒業後臨床に進んでいたとしたら……、きっと、“歯科医師は歯をいじる先生”というイメージのままだったでしょう」という。

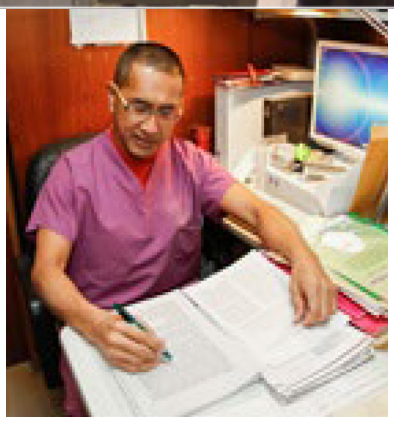
歯科医師としての二つ目のターニングポイントは父の経営する歯科医院を継ぐと決めたときだ。

「最初はどんな歯科医師になろうとか、全く考えていませんでした。いよいよ臨床の現場にでて、まずは技術を学ばないといかん!ということで､最初の１年間は親元で見学の日々、それから３年間、他の歯科医院で勉強して実家に戻ってきました。外の世界を見てくることで、父の守ってきた医院を継ぎたいと思うようになり、“このクリニックを引き継いでいくと決めたからには、患者さんと深く関わり、この人たちの歯を守ることが私の役目だ”。そう決意して、スタートを切りました」。

歯科医師としてのターニングポイント

診察をしている中で、病気になってしまった歯や延命状態の歯をいかに残すかが彼の一番の悩みであった。延命の歯とは抜けかけた歯、延命の歯があるということは、口腔内全体の状態もかなり深刻だ。風邪をひいたとかほんの小さなきっ





国際学会での発表

診察後は研究に・・・

「傷にはツバをつけておけば治る」。おばあちゃんの知恵のようなこの考えが私の原点です。納豆菌やフコイダンという、自然界に存在する成分から唾液と同じ役割を果たしてくれるものを発見し、製品化も実現。Web 上で発表している論文には、海外の方からも多くのメールが寄せられています。研究が世界中に届き、後世にまで残る。自分の生きた証として、非常に大きなロマンを感じています。

かけでガタガタっと自然に脱落してしまうこともある。実際その場面に直面したときはひどくショックだったという。その様な事態を見、「やはり患者さん本人に免疫力を上げることの意味を意識させなければならない」、と痛感したという。

「傷ついた歯や歯周組織は、見ためが健康でも元々の免疫力が下がった状態だ。そこに身体全体の免疫力まで下がってしまったら……」。そういったこともあり普段から全身の免疫力を高めておかないと、ちょっと何かあったときに口腔内は大ダメージを受けてしまうことを発見。そこで 全身の健康教育を治療方針の一環とし、患者さんの体調管理に介入することにした。ここから彼の免疫に対するアプローチが始まった。

免疫力は歯と全身をつなぐ

スタートは歯を残すところから。そのために重要になってくるのが栄養、日常生活、メンタル面だ。女性であればさらに婦人科系のことまで、その人自身に踏み込まなくてはいけない。そのため、歯学、免疫学以外にも分野にこだわらず勉強することになった。

ある時、歯を残すためには心身の健康が深く関係していて、“歯を残すための免疫”を手に入れるためには身体と心、すなわち肉体的にも精神的にも健康であることが大切だということに気がつき、それからは“人間そのもの”を見ていく方針に変わっていった。

「世間に“免疫”という言葉が浸透するまでは『体力をつけ

ましょう』とか、『バランスのとれた食事をしましょう』とか、そんな風に指導していました。今思えばこれらすべてが免疫力を高める要素でした」。

とにかく、通院するのが楽しいと思えるようなワクワクがいっぱいの医院づくりを目指している。「調子どうですか?」この言葉は診察する前に必ず聞くようにしている。こう質問することで患者さんは口腔内のことだけでなく、病気のことや気になっていること、つまり身体のことを話してくれる。全身のことを学んでいなければ自信をもって聞くことは難しいであろう。

また、螺良歯科医院では、矯正専門医である従兄弟の技術を提供することはもちろんのこと、患者にとって付加価値のある空間づくりを心がけている。

歯科が扱うのは歯のみではない。口腔、歯肉、口臭なども課題になっている。フコイダンによる、がん統合医療も行っている。舌がんや、口腔内の白斑状のがんや舌がんは鑑別診断が難しく手遅れになりがちであることから、切除に頼らずフコイダン軟膏などで治癒に至る患者も体験した。この様なフコイダンによる、がん統合医療も行っている。

また、NPO 統合医療と健康を考えるフコイダン研究会では世話人も務めている。

医療者としての思い

「今までを振り返って感じたのは、自分の信念を貫くことの大切さ。患者さんに対し、私は免疫の大切さを健康教育の一環として説いていこう、と心に決めています。個人差を考えるとマニュアル通りにはいきません。ですが免疫学は、そもそも“複雑多岐な学問”なのですから、先が見えなくても当然。伝え続けることが大切なのです。それは花を育てることと少し似ています。いつ咲くのかわからない種を蒔き、気持ちを込めて毎日水をやる。そうすれば、いずれその花は美しく咲いてくれます。患者さんが“健口”になり、全身の“健康”を手に入れることとは、美しい開花の瞬間だと私は考えます。」

「毎日の診療で免疫を伝えていてよかったと感じることがあります。口腔内に限らず、私との会話で「身体がラクになったよ」とか、「気持ちが軽くなった」と言ってもらえる瞬間……。その笑顔を見るたびに、医療者の原点を思い出します。患者さんが健康になったことを共に喜び合えるような歯科医師で在りたいですね。」

螺良歯科医院

〒 320-0802　栃木県宇都宮市江野町 9-6

診療時間

月 ~ 金　9:00 - 12:30, 14:00 - 18:00
土　9:00 - 12:30, 14:00 - 17:00
休診日　日曜・祝日

診療科目

一般歯科、小児歯科

TEL: 028-633-6480　http://tsubura-dc.com/

People's physician: Dr. Syuichi Tsubura

The Tsubura Dental Clinic in Eno-cho (Utsunomiya City) stands four-minutes walk from Tobu Utsunomiya Station, in an old 4-story building with vines crawling on the walls. When the first generation Gentaro Tsubura (died in 1970) established the clinic, it was a dentist's job to remove damaged teeth, he opened the clinic with the belief that "nothing beats teeth", and that feeling was passed on to the current director, and recieved a lot of trust. Dental health is related to various factors such as nutrition, sleep, and food supplements, but nowadays, a reliable dentist should also take care of patients from an integrated medical point of view.

Clinical & Functional Nutriology 2019;12(4):214-218.